

非言語コミュニケーションにおける 「右」と「左」の概念

— 異文化コミュニケーションの見地からの一考察 —

ジョリー幸子*¹

はじめに

現在の教育現場の中では余り使用されなくなったが、筆者の小中高等学校時代においては、体育の時間等に横に整列する時は、教師の号令で「右向け右!」と言われると、先ず頭を右に向け、自分の右肩先に立っている級友の左背の位置に合わせて、直線に並ぶよう躡られた。同様に「廻れ右!」と命令されると右足を左踵の後ろに引き、クルッと右に半回転して180度廻ったものである。「右へ倣え」と共にこれらの社会行動は、日本文化が「右文化」であることを提示していると考えられる。

大工道具を始め、家庭内や仕事場で使用する道具等にも右手扱いの物が多い。最近では僅かながら左手用のものも市場に出ることがあるようになったが、まだその絶対数は少ない。これから判断しても、世界の大半は右手使いの人々で占められていることが理解できる。約半世紀以前までは、日本は勿論のこと、アメリカのような個人主義をモットーとする国ですら、左利きの児童は右利きに直すよう訓練させられた。しかし、個性を尊重する教育や習慣が強くなっていく傾向にある今日では、今後は左利きの人々が徐々に数を増やしていくであろうと推察される。

このように世界の文化の中には、日本のように「右」の重要性を重視する「右文化圏」とそれ程左右の違いにこだわらない文化圏とが存在する。又、同じ「右文化圏」の中にあっても、ある事象については「左」を優先又は優位視する場合もあるので、必ずしも全ての現象が一方のみとは言えないことを前提に考察を進めてゆく。

小稿は日本文化を「右重視文化」という仮説の基に非言語 (Nonverbal) コミュニケーション上の、主として「右」及びそれに付随して「左」側について日本文化と異文化間での概念や習慣についての左右差 (laterality) について探究することを目的とするものである。

I. 英語の「右」の語源

“right”の語源はOld Englishの“right”(名詞, 形容詞), “rihte”(副詞), “rihtan”(動詞)が、ギリシャ語の“recht”又はラテン語の“rectus”に由来しているとされる(*Sanseido's College Crown English-Japanese Dictionary*, 1968, p.1565)。言語(verbal)の面でも英語の“right”は「右」という意味の他にも「正確な, 正しい」といった意味にも使用される。ラテン語に“dexteritaem”という言葉がある。この

*¹言語コミュニケーション学科

語彙が英語の“dexterity”に変化し、その意味は「1. 手際よさ、器用さ、巧妙さ、2. (才知などの) 鋭敏さ、機敏・利口さ、抜け目なさ、3. 右利き (right-handedness)」との説明がある一方、“dextral”の欄では「1. 右側にある、右向きの、2. 〈手が〉 右利きの (right-handed)、3. [動物] a 〈巻貝など〉 右巻きの、右向きの、右の」とある。当語彙は名詞の機能もあり「右利きの人」となっている (Kenkyusha's New English - Japanese Dictionary, 2002, p.672)。

これらとは反対に、「左の」という意味を持つ“sinister”という語は1 a. 悪意の (ありそうな)、陰険な、卑劣な、b. 災い [危険などを] はらむ、不気味な、2 a. 不吉な、縁起の悪い等を表す (*ibid.*, p. 2299)。このように「左」の意はラテン語の使用された古代ローマ時代からも、既に否定的なイメージ、意味合いを持って使われたことが伺える。ラテン語も英語も、左から右方向へ横に文字を綴っていくアルファベット言語であるので、当然右利きの方が物理的にも、心理的にも便利且つ有利であろうと考えられる。

次に、日本語の「右」について探索してみる。「右」は古くは「ミギリ」と言い「①北を向いた後東にあたる方、⇔ 左。② (漢代、座席を右の方を上としたことから) 上位。上席となっている」(新村編, *広辞苑*, 1955 p. 2107)。又、「左」の項目で興味をそそるのは「左前」という言葉で、「①衣服の右衽 (おくみ) を、左の上に重ねて着ること。普通の着方と反対で、死者の装束に用いる。…②物事の思うようにならぬこと。運の悪くなること…又「左巻き」は② (つむじが左巻きの人とは正常でないという俗説から) 調子が少しおかしいこと。頭の働きの狂っていること。また、その人」とある (*ibid.*, p.1870)。

以上右と左に関する東西文化の語源の意味上の特徴を比較してみたが、共通点として、右が肯定的なイメージを、左が否定的なイメージを表現していると判断できる。

Ⅱ. 異文化間の「右」と「左」

英国の爵位への数称の一つとして呼称される“Right Honourable…”やキリスト教聖職者の高位肩書きとしての“Right Reverend…”等がある。日本語でも「座右の銘」、「彼の右腕の…氏」、「…の右に出る者」等の表現があることから、人々の「右」への思い入れが多大であることを物語っている。人間の社会行動における上記の左右差 (laterality) について Morris (1977, p.84) は次のように述べている。

A great deal of human behaviour is asymmetrical. Laterality is demonstrated whenever an action demands more from one side of the body than the other. Every time we wave, wink, clap, shake a fist, cock an eyebrow, put an eye to a telescope, fold our arms, or cross our legs, we are forced to favour one side more than the other. Each such action requires a clear-cut decision, usually instantaneous and unconscious, to activate the two halves of the human body in different ways. Indecision and fumbling would mean inefficiency.

山本 (1994, p.14) は国際的プロトコール上の観点から五つの原則を以下のように挙げている。

Local customs respected	(異文化の尊重)
Rank conscious	(序列の重要性)
Right the first	(右上位)
Reciprocation	(返礼)
Lady first	(レディー・ファースト)

三番目の“Right the first”の欄について山本 (1994, p.16) は、

右上位とって、席次なら右側の席が上席になるのですが、どこから見て右と考えればいいのかを知っておかなければいけません。その基準は、主権者である自分です。まず主権者の位置を決めます。その右隣に主賓の第一位の人がきます。これが右上位の原則です。主権者の左隣は第二位となります。以下、順番に右・左・右…と置いていけばよいわけです。ここでも序列がきちんと組み立てられていなければならないのは、おわかりだと思います。どこの位置に立つか座るかでその人の序列が誰の目にもすぐにわかってしまうのです。ただし、晩餐会などで夫人が入ってくる場合などは、この序列は異なってきます。原則として右上位、ということ覚えてください。

外務省外務報道官の編集による『国際儀礼に関する12章』(1992, p.48) ではこの右上位の観念は「騎士道が盛んであった中世ヨーロッパにおいて、優雅で弱者である女性をいたわり、かばうことが、男性の品位を示すものと考えられ、そのために婦人を男性の右側において、尊重したことにともづいていませぬ」との説明が述べられている。

ここで興味深いのは、欧米式の女性を上位である右側にとという概念が、日本の伝統文化の中では反対側の左に位置される例があることである。これは後述の第三章「日本の伝統芸能に生きる文化の右と左」においても述べるが、伝統的な男尊女卑社会の日本においては、男性を「右上位」に考えるからである。敬意表示の作法として、その対象人物や国旗等のように国際間のプロトコールに関する文物を常に上位の席 (place of honors) におくことについて、友田 (2001, p.6) も、それらに対しては右側を与えると述べている。

…婦人と同列のとき、むろん自分の妻もふくめて、つねに婦人を右側におく。このことは、いかに日本の紳士が、このルールに反しているかは、一度歩をホテルのロビーにはこんでみると、いたるところに、この事実を発見する。西欧に、“Left hand lady is not a Lady”という箴言がある。婦人や長上の人とすれちがったときでも、男子は、かならず

それらの人々を右側にして、自分は左側によける、椅子をすすめる場合も、かならず右側の椅子にすすめる。これがすなわち上位の席である。

これについてはもう一つの文献からも同様の事象が伺われる。ドイツでの非言語行動の一つとしても、相手に敬意を表するマナーの一つとして、一緒に歩く相手を男女に拘らず右側にする、即ち自分は「必ず相手の左側を歩く」ようにと Sabath (2002, p.333) は、注意を喚起している。又同様に国際プロトコールにおける国旗についても下記のような述懐がある。

…自国と他国の国旗を併掲する場合、右側が上位席であるから、したがって外国旗に対しては、儀礼上原則として、上位席を与え、自国旗の右側に掲揚する。(友田, 2001, p.6)

この点において注目すべきことは、言語上との相違点である。外交交渉のような改まった場合ですら国名を並列する場合、母国語においては「日米」、「日ソ」の様に自国を先に並べるのが慣例である。これは米国人が英語で“US-Japan relationship”などのように自国名を先に並列するのと同様である。

寺西 (1985, p.175) によれば、

車の上位席については、ハンドルの左右を問わず、後席の進行方向「右側」が第一の席です。二番目は後席の左側、三番目は後席の真中です。とはいえ、日本のような車が左側通行で車寄せが左になることが多いところでは、乗り降りや左のドアからしなくてはなりません。この方式によると上位の人に乗車後、座る位置を右側に(奥に)ずらしてもらうことが必要になります。国賓でも、乗車するなり後席左側に腰を落ち着ける方が多いので、このような場合は無理に奥に移動してもらうようなことをせず、同乗者が車の外を回って後席右側に乗車、着席します。

職業運転手の車では、前席を使うことは稀です。(もともと、オーストラリアでタクシーに乗ると、運転手の隣「助手席」に座る例が多いと聞かされ、私自身もその経験をしました。「民主主義」の表れだとか)。

異文化間の握手等の接触のルールにも右、左の使い分けがある。握手は原則として右手で行うものとされている。右手に損傷のある場合は、この限りではないが、左手は東南アジア、或いは中東のアラブ・イスラム文化圏では「不浄の手」と言われて、トイレ等で使用するためのものであるため、左手を使って他人に物を差し出すことはもちろん、自身も左手で食物を口に入れることは避けるべきであるとされている。

アラブ社会において、出合いや別れの正式な挨拶として使われる動作が「額手礼(ぬかでれい)」で英語では“chest-month-forehead salaam”と呼ばれている(モリス, 1977, p.27)。右手で胸、口、額の

中央に触れ、最後にその手をかざす、その上にしばしばお辞儀を伴う敬意を表す動作である。その背景として、当挙動は、三か所に触れる完全な形で、その表現するメッセージは「私の心、魂、知力をあなたに捧げます」となる。正式な場合で用いられることが多く、日常的には、ある要素が省略される形が用いられる。最も一般的な省略形は、右手で額のみ、額と胸のみ、口のみ、口と顔のみ等となる。あまり西欧化されていないアラブ社会では「額手礼」が握手の代わりになる。（モリス, p.172）。これらのジェスチャーはしばしば“Salaam alaykum”（ご無事を祈ります）という言葉による表現を伴う（モリス, 1977, p.173）。

次に「右」が肯定的—或いは状況によっては特定の文化環境の中の習慣として好ましい、求められているといった意味合いの例をいくつか列挙してみる。

ジョリー（1999, pp.66-67）は熱帯地域ポリネシア文化の一例を取り上げ、

…小麦色の肌をした女性たちが、ハイビスカスや香りのよいプルメリアの花を髪に飾っているのをよく見かけます。世界各国からの観光客のガイドを務めていた（オアフ島にある）ポリネシア文化センターの案内役である若い男性職員が、マイクを使ってその熱帯の花を「未婚の女性は（頭の）右側に、既婚のおばさんは左に、少しイカレタ人は真ん中に飾るのが習慣です。ですからお客様も間違いのないように、真ん中に飾ってください！」

一方大草原のモンゴルではその移動式の円型の住居「ゲル」の中での日常生活において家族も来客も必ず右廻りに動くルールと習慣を持っている。右廻りに動くことで、限りある丸いゲルの中で大家族がぶつかり合うことなく、効率的に行動できるからという理由である。

Ⅲ. 日本の伝統芸能に生きる文化の「右」と「左」

日本の伝統芸能の多くが「右」を重視して実施、演出される。その顕著な例の一つが、茶道である。例えば裏千家流の茶道の諸行動をみても、「右」文化を代表していると思われる。先ず茶室への入口である「にじり口」であるが、通常向かって右側に位置しており、高さ二尺二寸（約67センチ）、横二尺一寸（約63センチ）が標準のものであり、現代人の体格には少し出入りがきゅうくつではある。次に図1にある茶道口を通して茶室に踏み込む足であるが、右足から踏み込み畳に入り、畳の黒縁は行き（往き）の動作に関しては必ず右足でまたぎ、道具畳に座してお茶をたてる点前を終えたあとは、必ず左足で黒縁をまたいで退室する。茶入れ、棗（なつめ）等の清めの動作から始まり、柄杓（ひしゃく）、茶筌（ちゃせん）の扱いに至るまで、殆どの道具も茶道においては右手扱いとなる。特に茶碗に入れた抹茶を客に差し出す際にも「逆勝手点前（ぎゃくがってでまえ）」の作法以外は、道具畳に座している亭主は、必ず右手で茶碗を持ち上げて、右方向に出さなければならない。客は普通亭主側から見て右側に座しているからであり、亭主のすぐ左手側は壁か襖があるのみである。又、興味深いのは茶道具の中にも重要なものの順番が決まっており、客が道具を「拝見」する儀式等においても一番大切と見なされる道具、例えば茶入れと茶杓ならば茶入れの方が客の「右膝」近くに置かれる仕組みになっている。このように、

「右文化」は茶道を始め、その他の日本の伝統芸能、弓道、剣道等の武道等においてもあてはまると聞き及んでいる。

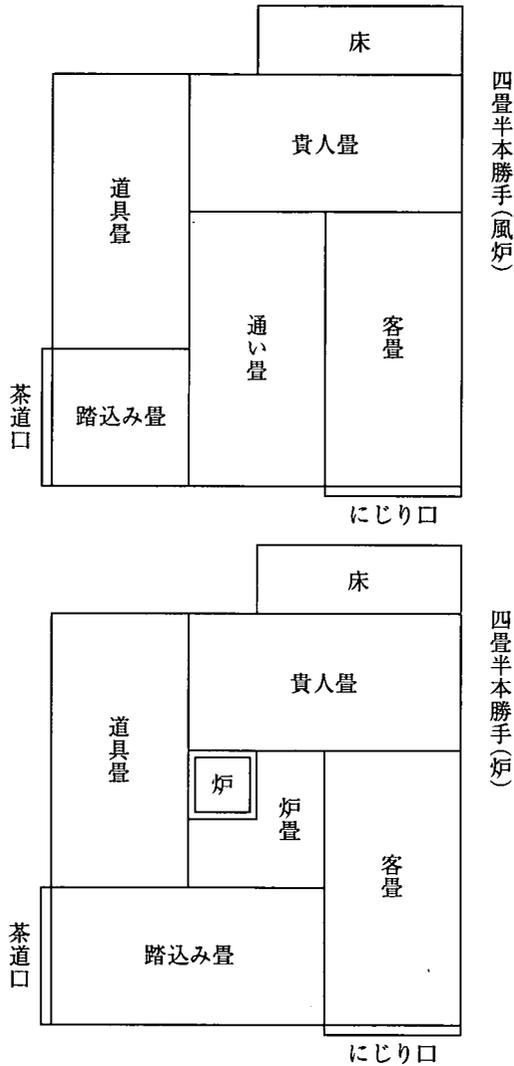


図1 新編 お茶の道しるべ (千 宗室, 1969, p.174)

弥生三月三日は雛祭り、通常内裏雛(だいらびな)とお雛様が赤い毛氈の雛壇の最上段に飾られる。少なくとも筆者が資料収集した範囲の今日の中部圏においては、この場合男性である内裏雛(天皇)が右側に座し、お雛様(皇后)は左側に置かれる。これは「親王雛」のセット飾りにおいても同様である。現在でも天皇と皇后の行幸、皇太子と皇太子妃の行啓の際の車内での座席の位置、テレビ等のメディアへの記者会見の際の椅子の位置にしても上記の雛壇と同様で、必ず右側に上位である男性が着座することにより、右文化を象徴していることが伺われる。

また今日の、一般の結婚式においても、挙式前後の際の記念撮影においても、新郎新婦は最前列の中

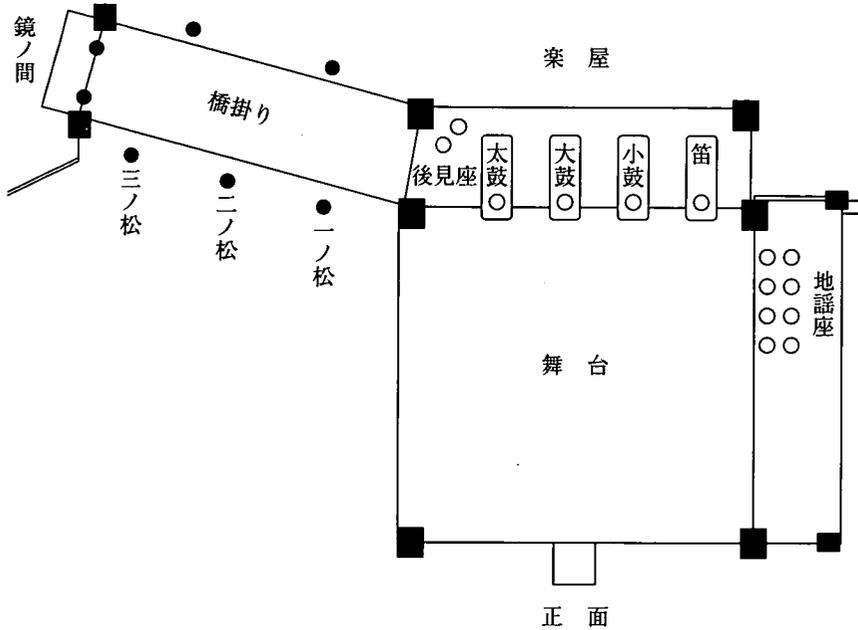
中央に座り、新郎が右側に座る。その後の披露宴においても新郎が前正面の席（メインテーブル）の右側に位置して着席するのが習慣となっている。

宗教別式典における「右」と「左」について考えてみる。キリスト教による結婚式では、カトリック派においては神父が、プロテスタント派では牧師が、神道による神前結婚式においては斎主が、仏前結婚式では司婚者が挙式を司るが、いずれも国境、宗教の相違を超えて右側が新郎、左側が新婦の位置で、親族の参列についても新郎側の親戚は右側に並ぶことが通例となっている。

従来伝統的な日本の教科書、参考書類を始め文書類は右とじであった。それは日本語が右から左方向へ縦に表記されるため、次のページをめくるためには当然右方向に動かしたからである。しかし、最近ではワードプロセッサの普及が横書きに追い討ちをかけ、英語を始めとする外来語（横文字）も日本語文章の中に頻繁に入ってくるようになると、やはり、左から右方向への「横書き」が便利になる。従って現代の書物、雑誌を見ると従来の右開きのものが、左開き方向の書簡や、書籍に押され気味の傾向にあるのが実情である。

今日の公文書等は、『官報』などの例外的な縦書き、右開きを除くと、その殆どが横書き、左開きに変わっている。従って現代のITの発達により、リアル・タイムによって目まぐるしいスピードで物事が進展して行くこのような傾向の中で、たまに縦書き、右開きのしかもボールペンや万年筆でなく、毛筆でしたためた手紙などを受け取ると、懐かしさ、奥ゆかしさと共に貴重感さえ感じ取ることがある。

以上、日本の伝統文化の中での「右」概念を中心に考察してきた。それでは日本は全ての伝統的芸能や日常生活において「右」が重要視され、守られてきたのかという疑問を持つ。筆者の調査した限られた範囲では、特に「能楽」においては「左上位」の観念の方が支配している。その一つ目は能舞台右側の地謡座（じうたいざ）に二列に座す地謡方（じうたいかた）についてであるが、6～10人で構成されるメンバーの序列は左へ行く程高くなるとされている。



能舞台の平面図

図2 裏千家学園公開講座 能と茶の湯 (種田道一, 2002, p.67)

但し地頭(じがしら)はメンバーを統率するため後列の中央左よりに座す。二つ目は、能舞台の正面奥に座す囃子方(はやしかた)のうち一番左翼を務めるのが、「笛」である、これは笛を人間の体の一番高い位置である顔面に当て、しかも口で吹く為最上位と見なされるからである。次の席に座するのが「小鼓(こつづみ)」奏者で、彼は次に高い位置をとる。口よりは下位にある肩の上に鼓を置くからである。三位が「大鼓(おおかわ)」で(肩より下にある)腹の前で打つからと言われる。「太鼓」は、胴体の前で打ち、しかも舞台下に座するため、最下位と見なされる。

もう一つの「左上位性」を示す伝統芸能の例として、書道等で扱う茶掛けの墨蹟(ほくせき)がある。一般的には室町時代以降の禅宗の高僧の書蹟をいうが、それ等は左方向に禅の句を筆と墨で書き並べた一行物が多い。

又、研究を掘り下げて行く内、更に「左」の上位性がいくつか、歴史的にも観察されてきた。その一つは西暦700年(文武4年)に発令された文武天皇による「大宝律令」である。中央集権的支配の基礎固めに貢献した、唐の「永徽(えいき)律令」を手本とした行政法である。これによると藤原宮や平城宮における中央の組織は2官8省に分かれており政治一般を司る太政官は、首席が「左大臣」、次が太政大臣、そして三位の「右大臣」が置かれている。更にその下には「左弁官」、少納言、「右弁官」の順で官位が定められている。

IV. 結論

以上の幾つかの例を見てきたが、基本的には日本文化は「右」上位の流れを持つが、左文化の名残り

も存在することが判明した。筆者はここでその仮説を、日本も古来は中国からの文物や儒教思想を導入するに際し、左上位文化に傾倒したのではないか。しかし、室町時代を中心に発展したこれらの伝統芸能は公家、武家だけでなく民衆の間にも、華道、茶の湯、香道、能、狂言、連歌、そして、その後の江戸初期からの歌舞伎等に受け継がれて右文化的傾向の伝統文化として広がっていったと考えるのが妥当ではないかと考えるようになった。

平安時代に既に発達していた猿楽は鎌倉時代には真面目な歌舞劇である「能」を生んだが、他方本来の笑いの要素が洗練されて、狂言と呼ばれるせりふ劇となり鎌倉、室町時代の主要な芸能となった（新村編 広辞苑, p.568）。筆者はこの時代が古来の左上位文化から、日本固有の右文化に転じて行った時代ではないかと現在考え模索を継続している。もし、上記のような仮説が正しいとすれば何故、その時代に「左」から「右」に方向転換したのか、その背景について探究するのが将来の課題である。

以上、非言語行動における「右」側文化と、それに関連しての「左」的意味合いを考察してきた。古代から中世の初期にかけての日本の政治組織の中に見る左大臣の右大臣に対する優位性なども存在するが、やはり現在では圧倒的に「右」の優位性の例の方が多い。いつ頃から、どのような理由で「右」の優位性に移行したのかは、今後の研究課題として残しておくとして、人間社会の「右」と「左」の概念について、および行動性について考えることはそれだけでも興味深いことである。

〈参考文献〉

- 外務省外務報道官（編）（1992）『国際儀礼に関する12章』世界の動き社
- ジョリー佐々木幸子、小池弘道（1999）『日本の常識はどこまで通じるか—異文化交流で失敗しないために』風媒社
- 千 宗室（1969）『お茶の道しるべ』主婦の友社
- 寺西千代子（1985）『国際ビジネスのためのプロトコール』有斐閣ビジネス
- 友田二郎（2001）『国際儀礼とエチケット』学生社
- 新村 出（編）（1955）『広辞苑』第二版 岩波書店
- 種田道一（2002）『能と茶の湯—裏千家学園公開講座』淡交社
- 氷川まりこ（2002）『能楽入門③ 梅若六郎 能の新世紀 古典～新作まで』小学館
- モリス・デズモンド（1999）『ボディートーク』「世界の身振り辞典—A World Guide Gestures」東山安子訳 三省堂
- 山本節子（1994）『現代プロトコール・わかりやすい国際交流マナー』ぎょうせい
- Kenkyusha's New English - Japanese Dictionary, Sixth edition* (2002) KENKYUSYA
- Morris, Desmond (1977) *Manwatching : A Study of Human Behaviour* KINSEIDO
- Sabath, Ann Marie (2002) *Business Etiquette 101 Ways to Conduct Business with Charm and Savvy*, 藤川実訳 スリーエーネットワーク
- Sanseido's College Crown English-Japanese Dictionary* (1968) SANSEIDO